

日本語教育用語彙に共通する語についての一考察

—動詞を中心に—

饗 場 淳 子

1. はじめに

日本語教育用の基本語彙や日本語教育用教科書の語彙は、同じ日本語教育を目的とする語彙であっても、それぞれの語彙に収録されている語の一致度はそれほど高くないと推定されている⁽¹⁾が、具体的にどのような語が共通しているのか、または非共通なのかについては、分析されることが少ないようである。実際には、それぞれ、限られた語数の範囲での選定であるため、日本語教育用の語彙に共通して採られる傾向がある語群やそれぞれの語彙を特徴づける語群があるのではないかと考えられる。この共通しやすい語群としにくい語群の特徴をとらえることは、日本語教育用語彙選定の手がかりになるであろう。そこで、小稿では、留学生や社会人など、一定年齢以上の学習者を対象とした日本語教育のための語彙表3種をとりあげ、3種に共通する部分の語彙を他の語彙表とも比較しながら、基本語彙に共通しやすい語群・しにくい語群について考察する。また、この共通する語彙を利用し、特に人文科学・社会科学系の知識の伝達・獲得に必要な動詞の抽出も試みる。

2. 調査の概要 —資料と方法—

目的や対象がほぼ共通した以下の3種の日本語教育のための基本語彙表を、共通する語彙を抜き出す資料としてとりあげる。これらは留学生や社会人など、ある一定年齢以上の日本語学習者を対象としている基本語彙で、目的や対象はある程度共通しているが、選定方法などが異なる語彙である。

- ① 国立国語研究所（1984）『日本語教育のための基本語彙調査』（6,103語）〈「基本調査」〉
- ② 国立国語研究所（1982）『日本語教育基本語彙七種比較対照表』（6,195語）〈「七種対照」〉
- ③ 玉村文郎（2003）「中級用語彙—基本4000語—」（4,043語）〈「基本四千」〉

①の「基本調査」は、「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得る」ことを目的としており、日本語教育でも活用されることが多い語彙である。語彙の選定手続きとしては、『分類語彙表』（国立国語研究所、1964）をもとに2回にわたる複数の専門家の判定をもとに選定している。②の「七種対照」は、日本語教育のための学習基本語彙を検討・選定するに当たっての基本的な参考資料として「主に外国人に対する日本語教育を直接の目的として選定あるいは編集された、既存の語彙表七種について、それらに収録された語彙を集め、それぞれの語彙項目について各語彙表間の

異同を比較対照させたもの」である。よって、体系性を持つ語彙表ではないが、複数の語彙表⁽²⁾を対照させており、ある程度の語数を持つため、比較の対象とした。①の文献によると、この語彙表は①の語彙とも比較、対照されており、その際、非共通語彙の調査もされたようであるが、その調査結果は①の文献にはないので、ここでとりあげてみたい。また、②の文献において、同じ日本語教育を目的とする基本語彙として選定されたものといえども、各語彙表で採用された語彙の共通性が意外に少ないことが指摘されていることから、この語彙表との比較によって基本語彙表間の語の共通度の高さ、低さの要因が見えてくるのではないかと考えた。七種を分けて扱うことも考えられるが、あまり細かく比較、対照すると、全体の傾向が見えなくなるおそれもあるため、小稿では七種全体をまとめて基本語彙表に入りうる語として取り扱う。

最後の③「基本四千」について、玉村文郎氏（2003）は次のように説明している。

児童から大学2年次程度までの生活・学習・研究にとって、また会社や工場での業務遂行にとって必要と考えられる最小限の語を選んだ。全体として高校以上の生徒・学生や成人の活動に役立つ語の率が大い。 (以下略)

『教育基本語彙の基本的研究 増補改訂版』（国立国語研究所，2009）によれば、③の語彙は、アルクのNAFL通信講座（1987年）で選定した基本2570語をもとに、次の基準で増補したものだという。

1) 総計4,000語をゴールとする。2) 1987年以降の言語・通信関係を中心にした新語のうち基本的なものを選ぶ（受信，フロッピー，イーメール，コンビニ，携帯など）。3) 主要宗教名を入れる（イスラム教，キリスト教，神道など）。4) 外国人日本語学習者には不可欠と考えられる語は積極的に採る（パスポート，旅券，ビザ，外国人，大使館，領事館など）。5) 文化・風俗・習慣の上で日本的なものは進んで採る（茶道，生け花，清める，お辞儀など）。6) 全体として，社会人・学生として共通に知っていて使えると思われるもの。

小稿の調査では，上記の国立国語研究所（2009）を使用し⁽³⁾，まず，3種の語彙表に共通する語を抽出し，品詞別（名詞・動詞を中心に）にその傾向と特徴を見る。次に，特に共通する動詞の特徴について，非共通の動詞や実際に使われている語彙（教科書語彙）とも比較しながら考察する。最後に，学生や社会人など，一定年齢以上の日本語学習者にとって，特に人文科学・社会科学系の知識の伝達や獲得に必要だと考えられる動詞の抽出を試みる。

3. 調査結果と考察

3.1 基本語彙に共通する語彙の特徴

3.1.1 3種の語彙表に共通する語彙の品詞別分布

「基本調査」，「七種対照」，「基本四千」の3種に共通する語彙（以下，共通語彙）は，3175語である。表1に，品詞別割合を示す。例えば，「基本調査」の名詞の「共通語彙の割合」（48.8%）は，「基本調査」の名詞（4346語）に占める共通語彙の名詞（2122語）の割合を示す。

それぞれの語彙に占める共通語彙の割合は，「基本調査」では52.0%，「七種対照」では51.3%，「基

表 1 各語彙における共通語彙の品詞別割合

品 詞	共通語彙	基本調査		七種対照		基本四千	
	語数	語数	共通語彙の割合 (%)	語数	共通語彙の割合 (%)	語数	共通語彙の割合 (%)
名 詞	2122	4346	48.8	4010	52.9	2750	77.2
代 名 詞	20	25	80.0	37	54.1	26	76.9
動 詞	632	967	65.4	1132	55.8	715	88.4
形容詞・ 形容動詞	171	312	54.8	289	59.2	189	90.5
副 詞	125	255	49.0	282	44.3	143	87.4
連 体 詞	15	24	62.5	25	60.0	18	83.3
接 続 詞	24	35	68.6	43	55.8	25	96.0
そ の 他	66	139	47.5	377	17.5	177	37.3
合 計	3175	6103	52.0	6195	51.3	4043	78.5

本四千」では 78.5% である。「基本四千」は、他の 2 種と共通する語彙の比率が高い。これには、「基本四千」の語数が他の 2 種より少ないことが関係しているのかもしれないが、一方で、「基本四千」が留学生・社会人などのための語彙の特徴をよく拾っているということも考えられる。

どの語彙においても、その語彙の中での名詞の割合は圧倒的に高く、動詞の割合は 2 割に満たない。しかし、各語彙における共通語彙の割合は、逆に動詞の方が高くなっている。「基本調査」では、他の 2 種とも共通している名詞の割合は 48.8% であるが、動詞は、その割合が 65.4% である。「基本四千」では、動詞の共通語彙の割合が他の語彙表と比較して非常に高く、9 割（88.4%）に近い。「七種対照」は、名詞と動詞の割合の開きが他の語彙表と比較して小さいが、それでも、動詞の割合の方が名詞より高い。全体的に、名詞は、各語彙に占める割合の高さの割に、共通語彙の割合が他の品詞と比較して低めである。また、動詞との比較では、名詞は語彙による違いが比較的大きく、動詞は名詞に比べて各語彙に共通する部分が大きいことが推測される。

3.1.2 対象が異なる語彙表との比較

この 3 種の語彙表の比較は、語彙表使用の対象がほぼ共通した語彙表間の比較であるが、対象が違う語彙と比較した場合にも同じ傾向が見られるのかを見るために、試みに、児童生徒のための語彙表である、『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』（6050 語）と『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査Ⅱ』（7502 語）⁽⁴⁾を入れて、語彙表 5 種を対照してみる。5 種に共通する語数は 2355 語であり、この共通する部分の各語彙に占める名詞と動詞の割合は、「基本調査」では、名詞 33.0% / 動詞 59.3%、「七種対照」では、名詞 35.7% / 動詞 50.6%、「基本四千」では、名詞 52.1% / 動詞 80.1%、となり、表 1 に比べて名詞の共通部分の割合は大きく下がるが、動詞の共通部分の割合は、名詞ほど大きく下らない。

この結果からも、基本語彙表間で比較的異同が大きいのは名詞であり、動詞は語彙表ごとの異同が名詞ほど大きくない（つまり、名詞に比べて共通度が高い）可能性が高いと言えるだろう。言い換えれば、それぞれの語彙表を特徴づけている大きな要素の一つは、名詞の選定であることが推測される。「基本四千」が増補の際の特徴としてあげている語（前掲）のほとんどが名詞であることも、そのあらわれであると考えられる。また、名詞に次いで各語彙における比率が高く、言語表現において重要な位置を占めている動詞⁽⁵⁾の語彙表間の共通部分の割合が比較的高いことは注目に値する。これは、基本語彙選定の上で重要な手がかりとなろう。

3.1.3 異なる時代の語彙表との比較

基本語彙表に共通する語彙においては、名詞の共通度に比べて、動詞の共通度の方が高いことが推測されるが、時代や社会の変化による影響について見るために、ここでは、基本語彙選定の先駆けと言われる土居光知氏による「基礎日本語」と3種の語彙表を対照する。

「基礎日本語」は約千語によって日本語を表現する試みであるが、動詞としても名詞としても使用できる語を採っていることや合成語を認めていることなどから、実際には千語以上が選定されているととらえることができる語彙表である。（拙稿 2007）また、土居氏による分類別の語彙選定となっており、一定の体系性を持つ語彙表と言える。「基礎日本語」の語彙表は何度か改訂されているが、ここでは、比較的大きな改訂を経て選定された土居（1943）の語彙表を使用する。

「基礎日本語」の動詞は71語であるが、土居氏の以下のような考え方にも従い、現在の言語意識において、もとの動詞とのつながりが意識されやすい語を抽出⁽⁶⁾した結果、146語が得られ、これらを加えて「基礎日本語」の動詞を217語とする。なお、「基礎日本語」における「足る」と3種の語彙表の「足りる」などは同語とみなした。

私は日本語を経済的に整理しようとして、動詞から始めた。私は眺め、疑ひ、思ひ、考へ、試み、企て、望み、願ひ、驚き、恐れ、偽りの如く、動詞であるとともに名詞である語を取つた。そして名詞として取扱ひながら、送りがなを附けて、これらの語は動詞として使用さるべきことを示した。（土居、1946）

この「基礎日本語」の動詞217語を3種の共通語彙（3175語）と対照した結果、共通語彙に動詞の終止形で採られている語と、終止形では入っていないが他の形で入っている語（催しなど）を合わせると189語となり、これは、「基礎日本語」の動詞の87.1%にあたる。また、3種全部と共通していなくても、1種ないしは2種と共通している語は20語あり、終止形・連用形等いずれの形でも3種に入っていない語は8語のみであったことから、「基礎日本語」の動詞のほとんどが、なんらかの形で3種の語彙表のいずれかに入っていることになる。

他の品詞の語も合わせて、「基礎日本語」全体をみると、3種共通語彙と共通していない語（動詞の連用形など共通語彙にはない形で採っている語を含む）は299語あり、そこから、動詞と、動詞としても使用できる語（合わせて117語）を除くと182語となる。この182語中、134語（73.6%）が

名詞であり、そのほとんどが現在でも使用されている語であるが、「はかま、外套、砲、植民、蓄音機、停車場」など、現在、日常生活ではあまり使われない語⁽⁷⁾や選定された時代や社会などを感じさせる語も入っていることが、語彙表全体を古く感じさせる要因の一つとなっているのではないだろうか。この「基礎日本語」との比較、対照の結果から、名詞は、時代や社会の変化などの影響を受けやすく、動詞は、比較的それらの影響を受けにくく、普遍性が高いことが示唆される。

3.2 基本語彙に共通する動詞の特徴

3.2.1 3種の語彙表に共通する動詞

ここでは、基本語彙表間で高い共通度を示していた、動詞の特徴について検討する。3種の語彙表に共通する動詞（以下、共通動詞）は、632語であり、これは「基本調査」の動詞の65.4%、「七種対照」の動詞の55.8%、「基本四千」の動詞の88.4%にあたる。

この共通動詞の性格を見るために、意味分野の観点から分類別（中項目）に語数の多い順に5項目あげる。

- ①「2.15 作用」237語（37.5%） ②「2.30 心」104語（16.5%） ③「2.12 存在」58語（9.2%）
④「2.33 生活」35語（5.5%） ⑤「2.11 類」30語（4.7%）

参考に、林彦伶氏（2009）による調査から『分類語彙表 増補改訂版』（2004、以下『分類語彙表』と略す）の分類別（中項目）の割合の高い順に5項目あげると、①「2.15 作用」24.3%、②「2.30 心」17.8%、③「2.33 生活」9.5%、④「2.31 言語」7.0%、⑤「2.36 待遇」6.4%となる⁽⁸⁾。共通動詞・『分類語彙表』ともに、「作用」と「心」が中心となり、他の項目に比べて高い割合となっている点において、共通動詞はかなり絞られた語彙ではあるが、『分類語彙表』とはほぼ同じ傾向を示している。『分類語彙表』は、日本語の使用実態をある程度、反映していると考えられることから、これらの分類に属する語が、日本語には多く、よく使われており、それが基本語彙選定にも反映されている様子が見えがえる。3～5位を見ると、「生活」が入っている点では共通しているが、共通動詞には、「存在」、「類」が、『分類語彙表』には「言語」、「待遇」が入っていることから、基本語彙には、抽象的でどのような事象・現象も説明できる語の割合が高くなる傾向があることが推論される。共通動詞の「作用」と「心」の語例を表2と表3に示す。（以下、小稿では、複数の漢字表記が付されている場合、原則として最初にあげられている表記に代表させることにする）

共通動詞は、単純動詞が中心となっており、形態・意味ともにより複雑な動詞の土台となるような語群にも見えるが、日本語学習の初期段階から提出される語ばかりとは言えない。共通動詞を『日本語能力試験出題基準 改訂版』に従って分類⁽⁹⁾すると、4級：102語（16.1%）、3級：144語（22.8%）、2級：332語（52.5%）、1級：51語（8.1%）、級外：3語（0.5%）で、2級の語が中心となっており、1級や級外の語も入っている。ある一定年齢以上の学習者のための動詞は、学習段階とは違った重要度や必要度の観点からもとらえ、検討する必要があるということであろう。

表2 共通動詞「2.15 作用」の語例

働く、変わる、動く、化ける、改まる、遣り直す、取り替える、乗り換える、始まる、始める、開く、終わる、仕舞う、閉じる、跳ねる、止む、止める、止す、休む、止まる、流れる、見送る、続く、続ける、通す、重なる、重ねる、繰り返す、動かす、震える、振る、揺れる、回す、回る、収まる、傾く、転がす、転がる、置く、敷く、受ける、掛ける、吊る、吊るす、渡す、凭れる……

表3 共通動詞「2.30 心」の語例

頑張る、励ます、覚える、感じる、気付く、臭う、知る、分かる、驚く、沸かす、沸く、呆れる、乾く、酔う、覚める、飽きる、疲れる、眠る、寝る、覚ます、晴れる、喜ぶ、楽しむ、恐れる、怒る、慰める、腐る、慌てる、苦しむ、困る、詫びる、嫌う、憎む、愛する、懂れる、恨む、頼む、泣く、微笑む、笑う、叫ぶ、歌う、溺れる、努める、励む、堪える、怠ける、憤む、望む……

3.2.2 1種の語彙表にしか見られない動詞

ここでは、共通動詞と比較するために、3種のうち1種の語彙表にしか入っていなかった動詞について検討する。1種の語彙表にしか入っていなかった動詞は、「基本調査」(122語)、「七種対照」(257語)、「基本四千」(23語)であった。

1種の語彙表にしか入っていない語には、全般的に複合動詞が多く見られる。この要因として、「基本調査」が、所載語の単位が比較的短い『分類語彙表』(1964)をもとにしたため、複合動詞が少ない可能性が高く、各語彙表間で複合動詞が共通しにくかったのではないかと考えられる。それぞれの語彙表にのみ見られた「動詞+動詞」⁽¹⁰⁾の複合動詞は、「基本調査」122語中23語(18.9%)、「七種対照」257語中132語(51.4%)、「基本四千」23語中6語(26.1%)となっている。共通動詞(632語)における複合動詞が38語(6.0%)であることと比較してみると、それぞれの語彙表にのみ見られる動詞における複合動詞の割合の高さがわかる。特に「七種対照」における複合動詞の割合の高さが目立つ。前述のとおり、「七種対照」の語彙は共通性が意外に少ないことが指摘されているが、各語彙表の語をできるだけもとの形で再録したこと(国立国語研究所, 1982)が複合動詞の多様性につながり、七種語彙表間の語の共通度の低さの原因の一つともなっている可能性がある。名詞でも「彫刻」と「彫刻家」が別々に入っていたり、「資本主義社会」などの長い単位の語がそのまま入っていたりしている。

このことから、複合語をどこまで入れるかが、基本語彙間の共通度に大きく関わっていると考えられる。特に中級以降の日本語学習では複合語が増加し(森田, 1986)、学習上の重要性が増すが、基本語彙にどの語を入れるのかについては、その認定が困難であることがここにあらわれている。今回、採集した語の中では、限られた語数であったためか、複合動詞の前項・後項成分に顕著な傾向は見られなかったが、今後、この観点からも基本語彙における複合語について検討する必要がある。

次に、共通動詞と同様、意味分類別(中項目)の語数の多い順に項目と語数をあげる。

「基本調査」①「2.15 作用」38語 ②「2.30 心」23語 ③「2.31 言語」11語

「七種対照」①「2.15 作用」115語 ②「2.30 心」35語 ③「2.33 生活」19語

「基本四千」①「2.15 作用」11 語 ②「2.12 存在」3 語 ③「2.13 様相」2 語

共通動詞と同じく、「作用」と「心」は、ここでも大きな位置を占めているが、1 種にしか見えない語には、意味的にさらに複雑で豊かな表現を可能にする語が入っている様子がうかがえる。例えば、1 種にしか入っていない「作用」と「心」の中には、「2.15 作用：ぶら下げる、漂う、ためらう、解け込む、引きずる、遮る、差し替える、絶つ、震わす、行き渡る、擦れ違う、寄せ集める、引っ繰り返る、ぶらつく」、「2.30 心：脅かす、嘆く、甘やかす、心掛ける、察する、羨む、自惚れる、考え込む、照らし合わせる、企てる」などの語が見える。「作用」と「心」の次に語数の多い項目の語を見ると、「基本調査」の「言語」には、「言い出す、語る、話し合う、物語る、論ずる、告げる」のような話すことに関する語のバリエーションが多く、「七種対照」の「生活」には、「啜る、寝転ぶ、扇ぐ、摘む、筆る、蹴飛ばす、よろける」など、具体的な日常の動作に関する語が充実している。このように、1 種にしか見えない語群には、各語彙表に共通する語群に比べて、形態的・意味的により複雑な語が入る傾向があり、また、それぞれの語彙の特徴が見られる部分でもあったと考えられる。

3.2.3 教科書に使われている動詞との比較

ここでは、共通動詞と実際に使用されている語彙との重なりを見るために、高校教科書の語彙と比較する。高校教科書には、学生や社会人など、一定年齢以上の人が教養や知識の体系の土台として必要とする語が多く含まれていると考えられる。比較の対象として国立国語研究所の『高校教科書の語彙調査』の社会科の語彙をとりあげる。『高校教科書の語彙調査』は、「国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要と思われる語彙の実態を明らかにする」ことを目的として行われた調査であり、特にこの語彙の中核部分は、小稿で対象としている留学生や社会人などにとっては、必須の語彙であろう。

本調査では、社会科の語彙の中心的な語彙として、社会科語彙の基幹部分を抽出した「社会科基幹語彙」を利用する。「社会科基幹語彙」とは、土屋信一氏が、林四郎氏（1971）の「基幹語彙」の考えに従い、何科目の教科書に入っているかという観点と語の使用率の観点を組み合わせて、一定の基準に従って抽出した 2071 語の語彙である⁽¹¹⁾。2071 語中、動詞は 307 語⁽¹²⁾であるが、この中で、共通動詞に入っている語は 226 語（73.6%）で、「社会科基幹語彙」の動詞は共通動詞と大きく重なっていることから、共通動詞は社会科教科書を読んで理解する上でも有用な語群であると言えよう。

3 種のどの語彙表とも重ならない語「陥る、課する、繰る、際する、しのぐ、称する、乗ずる、脱する、呈する、転ずる、留まる、留める、唱える、逃す、発する、はばむ、率いる、振う、まじえる、ゆだねる」は、「社会科基幹語彙」に特徴的な語であると考えられる。これを見ると、「社会科基幹語彙」の動詞は、「課する」などの「一字漢語＋する」の使用に特徴があるようである。上記の語群の中だけでも 8 語見られるが、共通動詞と共通している語（226 語）の中には「対する、達する」など 8 語が見られるのみである。これらは、「社会科基幹語彙」の資料の性格から考えると、社会の事象・現象の記述や知識の伝達や獲得に特徴的に使われ、欠かせない動詞群ととらえられるが、基本語

彙に共通しては入りにくいのかかもしれない。「一字漢語＋する」は、一定年齢以上の人のための語彙選定の場合、参考にすべき動詞群であると考えられる。

3.3 知識の伝達や獲得に必要だと考えられる動詞

3.2 では、基本語彙に共通する動詞を中心に見たが、その中でも、一定年齢以上の学習者にとって、特に人文科学・社会科学系の知識の伝達や獲得に必要だと考えられる語を試みに抽出し、その性格を見る。

これまで見てきた共通動詞と、本調査で比較・検討の対象とした「基礎日本語」（一定の体系性を持つ、知識の伝達や獲得のための最小限の語彙）、「社会科基幹語彙」（実際に母語話者が知識の伝達や獲得に使用している語彙）に共通している動詞は、留学生や社会人の教養や知識の体系を支えるために必要な基本的動詞であると考えてよいのではないだろうか。共通動詞と、「基礎日本語」⁽¹³⁾、「社会科基幹語彙」に共通する動詞を抽出したところ、次の 102 語が得られた。

表 4 共通動詞・「基礎日本語」・「社会科基幹語彙」に共通する動詞

会う、上げる、与える、当てる、集まる、争う、表す、有る、言う、行く、入る、居る、受ける、動く、打つ、生まれる、売る、得る、置く、送る、行う、押す、恐れる、衰える、驚く、思う、居る、終わる、買う、返る、掛かる、限る、書く、貸す、勝つ、借りる、考える、感じる、聞く、組む、来る、苦しむ、加える、越える、答える、異なる、避ける、定める、示す、知る、過ぎる、優れる、進む、為る、倒す、蓄える、出す、助ける、立つ、保つ、足りる、作る、付ける、伝える、続く、勤める、出来る、問う、捕らえる、取る、流れる、成る、握る、似る、願う、残る、除く、望む、乗る、計る、始める、走る、働く、払う、引く、開く、任せる、巻く、待つ、招く、守る、認める、見る、結ぶ、持つ、求める、止める、許す、読む、別れる、忘れる、渡る

102 語という限られた語数の語彙であるが、いくつかのグループに分けて考えることができそうである。ここでは、林四郎氏の考え方に従って、この 102 語が、頭の中の語彙の構造の中で、どのような位置にあるのかという観点から、その性格の一端を見ることにする。林氏（1987, 初出 1982b）は、日本語を使っている日本人の頭の中で、語彙は、(1) 文法機能語 (2) 準文法機能語 (3) 機能的接辞 (4) 思考基本語 (5) 叙事基本語 (6) 方面別基本語 (7) 方面別発展語の単語グループの集合として存在し、(1) を中核として、そのまわりに (2) ～ (7) が順次、層をなして取り巻いていると見る。(1) と (3) に動詞は入っていないため、(2) から検討していく。

(2) 準文法機能語の動詞の中では、どんな文章の中でもよく使われる点で、「する、なる、ある、いる、いう」の五語が顕著であるとされているが、これらは 102 語の中にもすべて入っている。林氏によると、これらの動詞は、特定の動作や事態を表すよりも、認識する頭の働きを表す場合の方が多いとされる。これらに続いて、補助動詞に使われる動詞があり、102 語中、林氏の語例と重なっているのは、「いく、くる、みる、おく」である。

(4) 思考基本語は、形式名詞や補助用言から見れば、もう一段、実質的意味をもっているが、その意味が抽象的で広く、私たちの認識や思考の枠組みを作るのに働いている言葉、とされる。林氏が語例としてあげている動詞の中では、「動く、開く、終わる、続く、受ける、思う、与える」が、102

語と重なっている。林氏によると、思考基本語は、一見むずかしげでも、それをそなえてしまった者には、もう、その言葉なしにはすごせないという性質があるという。日本語学習者にとっては、習熟することによって、より理解力や表現力が増す重要な語群であろう。上記の語以外にも、「似る、異なる、表す、示す、保つ、過ぎる、限る、考える、認める、定める」など、102語の中の語の多くがこのグループに属すると考えられる。

(5) 叙事基本語は、(4) がものをとらえるために用いる、こちらの頭の側の用語であるのに対し、もっと素朴に、目で見たもの、耳に聞こえたもの、手でとらえたもの、などを、「これだ。」「それだ。」と認知して名づけた言葉、とされる。林氏の語例と重なっている語は、「生まれる、衰える、取る、走る、持つ、読む、買う、聞く、書く、売る」である。この他には、「倒す、押す、流れる、勝つ、待つ、貸す、借りる」などもこのグループに入れてよいと考えられるが、問題となるのは、具体的な事象に名づけた語としての性質も持ちつつ、実際の使用では、そこから派生した抽象的な意味でも比較的よく使用される語である。この102語には、「当たる、結ぶ、付ける、組む、捕らえる」などのように単純には分類しがたい語が散見され、これもこの語彙の特徴であろう。

(6) 方面別基本語と(7) 方面別発展語は、林氏の語例によれば、名詞が中心となっている。(6) は、常識の範囲でも必要な語や、それぞれの分野では基本的と言える語も入っている、知識や研究のための語のグループで、(7) は専門語の世界である。102語の動詞群の抽出資料の性格を考えると、この方面別基本語や方面別発展語を定義したり、説明したりするために活用される思考基本語、叙事基本語がとりだされた可能性が高い。

ここに抽出された動詞は、主に準文法機能語、思考基本語、叙事基本語から成り立つが、全体的に意味が抽象的で広く、認識や思考の枠組みを作るのに働く語の性格を色濃く持っているようである。数は少ないが、かなりの表現力を持ちうる、母語話者だけでなく、留学生や社会人など、ある一定年齢以上の人の知識の伝達・獲得に欠かせない動詞群であると考えられる。

4. まとめと今後の課題

日本語教育のための語彙に共通する部分では、名詞より動詞の共通度のほうが高く、各語彙の性格や特色の違いは、名詞や複合語の選択の違いによる部分も大きいようである。また、動詞は、比較的、時代や社会の状況の変化に影響されにくく、名詞はこれらを反映しやすいのではないだろうか。この結果から、基本語彙選定にあたっては、まず動詞から検討していくことも有効であると考えられる。また、小稿では、試みに、特に人文科学・社会科学系の知識の伝達・獲得のために必要であると考えられる動詞群を抽出し、その性格の一端を見たが、これらの語は、それぞれの語の造語力、他の品詞の語との関わり、実際の言語生活における有効性などの観点からさらに精査していく必要がある。これについては今後の課題としたい。

注(1) 『日本語教育事典』、今西利之・神崎道太郎(2008) 他

- (2) 国立国語研究所日本語教育センター（1978）『日本語教育基本語彙第一次集計資料—2,000語』（第一研究室内部資料）が含まれる。（国立国語研究所，1982）
- (3) 国立国語研究所（2009）「日本語教育基本語彙データベース」を使用し，その情報に従った。品詞については，一語に複数の品詞が付されている場合，最初の品詞をとった。意味分類番号については，同文献の新しい「教育基本語彙データベース」を利用したため，『分類語彙表 増補改訂版』に基づいている。一語に複数の分類番号が付されている場合，最初の番号をとった。
- (4) 上記（3）と同じく，国立国語研究所（2009）のデータを使用した。同書によると，次の文献のデータである。工藤真由美（1999）『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』ひつじ書房，木幡智美（1998）『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査Ⅱ』横浜国立大学大学院教育学研究科
- (5) 森田良行氏（1977）は，言語表現において動詞の占める役割は大きい，とし，国立国語研究所『現代雑誌90種の用字・用語』のデータをとりあげ，名詞グループは語彙比率の高い割には文法的にさほど複雑でも重要でもないことを考慮に入れたら，その比率，78.4%が即重要度の高さにそのまま結びつかず，比率第2位の動詞グループは重要度から言って決して11.4%などという低い価値ではないと述べている。
- (6) 『岩波国語辞典』などの辞典を参考にし，もとの動詞が現在も使われており，かつ，もとの動詞とのつながりが比較的容易に意識されうると考えられる語を抽出した。主に動詞の連用形（「感じ」なども含む）から採ったが，動詞につながる語として，「乾いた，富んだ」の形で選定されている語（8語）からも採集した。
- (7) 『日本語教育ハンドブック』によれば，日本語教育の場では，日本理解という目的もあって，日本特有の事物を指す語は，日常生活の中ではそう頻繁に使われる語でなくても，教科書においてわりによく用いられている，という面もあるようである。
- (8) 『分類語彙表 増補改訂版』は，文法上の自立する「単語」を基本にするが，それと同様の意味上の働きを持つ連語・接辞・慣用句等を排除しない，という方針をとっており，小稿の調査とは語の単位が違うため，厳密な意味での比較はできないが，意味分類別分布は日本語語彙のおおよその傾向を示しているものととらえて，参考にした。
- (9) 3, 4級語彙表と1, 2級語彙表に同じ語が出ている場合，3, 4級語彙表の級をとった。
- (10) 接辞的になっている成分の複合も含む。（打ち込むなど）
- (11) 土屋（1992b）の語彙表を使用する。同文献の中では，2061語となっている。
- (12) 『高校教科書の語彙調査』では，「せる，させる，れる，られる，～まる，～める，於く，於ける」も用の類（動詞）に入っているが，ここではこれらを除いて検討する。
- (13) 「基礎日本語」の動詞は，3.1.3で動詞とした217語を使用する。

参考文献

- 今西利之・神崎道太郎（2008）「日本語教育初級教科書提示語彙の数量的考察」『熊本大学留学生センター紀要』第11号 熊本大学留学生センター
- 国際交流基金他（2002/2007 第4刷使用）『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』凡人社
- 国立国語研究所（1982）『日本語教育指導参考書9 日本語教育基本語彙七種 比較対照表』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1983）『国立国語研究所報告76 高校教科書の語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所（1984）『国立国語研究所報告78 日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所（2000）『国立国語研究所報告116 日本語基本語彙—文献解題と研究—』明治書院
- 国立国語研究所（2004）『国立国語研究所資料集14 分類語彙表—増補改訂版—』大日本図書
- 国立国語研究所（2009）『国立国語研究所報告127 教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—』明治書院
- 玉村文郎（2003）「中級用語彙—基本4000語—」『日本語教育』116号 日本語教育学会
- 土屋信一（1992a）「基幹語彙を求めて—語彙表データの分析—」『日本語学』11-1 明治書院
- 土屋信一（1992b）「文化語彙の探索—社会科基幹語彙表—」『共立国際文化』第2号Ⅰ 共立女子学園共立女子大学国際文化学部

土居光知（1943）『日本語の姿』改造社

土居光知（1946）「基礎語」『思潮』第一巻第三号 昭森社

林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」『国立国語研究所報告 39 電子計算機による国語研究Ⅲ』秀英出版

林四郎（1982a）「基本語彙—その構造観」『講座日本語の語彙 第1巻語彙原論』明治書院

林四郎（1982b）「日常語・専門語および表現語」『講座日本語学 1 総論』明治書院

（林四郎（1987）「頭の中の語彙の構造」『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院（再録、一部修正）を使用）

森田良行（1977）「日本語の動詞について」『講座日本語教育』第13分冊 早稲田大学語学教育研究所

森田良行（1986）「初—中級移行過程における語彙教育」『講座日本語教育』第22分冊 早稲田大学語学教育研究所

林彦伶（2009）「『分類語彙表』における各意味分野の語数」『語彙研究』7号 語彙研究会

『日本語教育事典』（1982 初版 / 1983 使用）日本語教育学会編 大修館書店「基本語・基礎語」の項（窪田富男執筆）

『日本語教育ハンドブック』（1990）日本語教育学会編 大修館書店「基本語彙・基礎語彙」の項（玉村文郎執筆）

饗場淳子（2007）「土居光知「基礎日本語」の資料性—選定語の変遷を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 15-1 早稲田大学大学院教育学研究科